

## 「近づいて来られる神」

マタイによる福音書1章18-25節

森島 牧人 牧師

いよいよクリスマスシーズンがやって来ました。日本では、一年の始まりはお正月の1月1日ですが、キリスト教会・キリスト教国ではそうではなくて、神に感謝する感謝祭で一年が終わり、イエスさまをお迎えする準備、つまりクリスマスを迎える準備を始める日から、新しい年がスタートすることになっています。

プロテスタント・キリスト教国として始まったアメリカからは、多くの宣教師が日本に派遣され、教会やキリスト教の学校がたくさん生まれて現在に至っています。そのようなアメリカに私も仕事や研究で度々行き滞在しましたが、その時アメリカにはクリスマスの他にもう一つ大きなお祭りがあることを知りました。それは感謝祭、いわゆる“Thanksgiving Day”です。日本でも勤労感謝の日というものがありますが、アメリカの感謝祭はアメリカの歴史に非常に関係するアメリカ的な祝日です。

ヨーロッパから渡って来たキリスト教徒によって開拓されて行ったアメリカ合衆国ですが、それは1620年に始まりました。メイフラワー号に乗ってイギリスのプリマスを出港、新しい大地を目指したのは自分たちを「ピルグリム・ファーザーズ」と呼ぶキリスト教徒たちでした。無事に上陸すると人々は、その場所を自分たちの出発した港町と同じ名前プリマスと名付けます。しかしほっとするのも束の間、一行は自然のままの大地でどう生きて行くか・食物をどう調達するかという問題に直面することになりました。イギリスから持って行った植物は新しい土地には合わず、町の暮らしをしていた人々には漁の経験も猟の経験もなかったからです。

そんなプルグリムを助けたのがネイティブ・アメリカンのワンパノア族でした。彼らは途方に暮れる人々にその土地に合った農業・漁業・狩猟などの方法を教え、人々は一生懸命それを習得しました。そして翌年の秋には多くの収穫を得ることが出来たのです。プルグリムたちはその収穫を神に感謝し、助けてくれたワンパノア族の人々を招いて盛大なパーティーを開きました。これが感謝祭の始まりです。このことを憶え伝えて行こうという動きと共にそれは世界的なお祭りになって行ったのでした。

この時の感謝祭のように1年の神への感謝をもってその年の終わりとし、神の子、主イエスをお迎えする準備を始める、これがアドベント（待降節）で、新しい年の始まりです。今ここにアドベント・克蘭ツと言われる4本の蠟燭があって、その中の1本にだけ灯が点されています。アドベントの第一主日である今日から主イエスをお迎えする準備が始まったということです。これから主日毎に1本ずつ蠟燭が点されて行くことになるのですが、何時頃からか、この4本の蠟燭はそれぞれに意味を持つと言われるようになりました。1本目は希望、2本目は平和、3本目が喜び、そして4本目が愛です。1本目は希望ですから、希望ということを考えながらこの1週間を過ごすこととなります。そして1週間毎に平和、喜び、愛という灯を心の中に増し加えて行くのです。

この<到来>という意味を持つアドベントはラテン語のアドベントゥスから来ていて、キリストの到来を意味し、さらにキリストの再臨を表現する言葉としても用いられるようになりました。カトリックとプロテスタントからなる西方教会では、11月30日の聖アンデレの日に最も近い日曜日からクリスマス・イブの24日までの約4週間をアドベントとして来ました。従ってアドベントの最初の日は年によって動き、最も早い年が11月27日、遅いのが12月3日で、今年は最も遅い年となっています。キリスト者たちは、世界にキリストが来られたクリスマスの準備をすることを大切にしてきたのです。

争いや憎しみなど穢れに満ちた世界、暗い闇に覆われたこの世に、神の独り子が真の光として来てくださる、しかも私たち人間を神の子どもとするために人間となって……。私たちのために主イエスを送ってくださったこの神の愛を、心から喜んで待ち望むのがアドベントです。つまり、「お前たち、救われたいのなら来い」ではなく、どうしたらいいのかわからず狼狽するばかりの人間のところへ、この世界へ、神の方から<近づいて来てくださった>、これが主イエスのご降誕・クリスマスです。これから毎週この神の愛を考えながら、クリスマスを迎える準備をして参りたいと思います。

(説教要約 羽入田悦子)